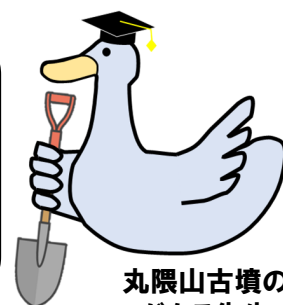




「貯蔵穴(ちょそうけつ)」って、なんだピヨ？

食糧などを保存するために掘られた穴のことです。とても深く掘られていて、入口となる上の方よりも、底の方が広いのが特徴です。縄文時代や弥生時代の集落から見つかることが多いんですよ。



丸隈山古墳の
があこ先生

けやごう

2022年に発掘調査した警弥郷B遺跡(南区弥永4丁目)でも、約2,500年前の弥生時代の貯蔵穴が4基、見つかりました。

4基の貯蔵穴のなかで大きなものは、平面が約1.5m×2mの楕円形をしていて、深さは1.5mほどありました。

穴を深く掘ることによって、地表の温度変化の影響を受けにくくして、食糧をより長く保存できるようにしていたと考えられています。



警弥郷B遺跡の貯蔵穴(矢印は小型の壺)



出土した小型の壺

穴の底からは、高さ13cmほどの小型の壺が横に倒れた状態で出土しました。壺には3本線で山形の文様が刻まれています。これは、弥生時代でも早い時期の小壺によくみられる特徴です。この土器が出土したことによって、貯蔵穴がいつごろ使われていたのかもわかったんですよ。

警弥郷B遺跡では、弥生時代以降、小高い台地の上に人々が集落を営んでいたことがわかっています。おそらく、近くの低地に水田を作り、コメ作りをしていたのでしょう。

水田を維持するためには、水を引き込んだり、排水したりするための土木作業が必要であるため、集落の人たちは共同作業により水田を営んでいたと考えられます。今回見つかった貯蔵穴は、水田で作ったコメなどの食糧を、集落の人たちが共同で管理するための施設だったのかもしれないですね。